

平田伊都子著 『ラストコロニー西サハラ』  
(2015 社会評論社)

箱山 富美子

(日本モーリタニア友好協会会長、元ユニセフ職員、元藤女子大学教授)

この本のどのページからも著者の西サハラに寄せる共感と、社会的不正義への憤りがひしひしと感じられる。西サハラに初めて足を踏み入れた1992年から、難民テントや、ポリサリオ戦線、またティンドゥフの亡命政府を訪ねる著者の西サハラ詣が始まる。著者を捉えたのは、国際政治の理不尽さに翻弄され、今まで住んでいた地を追われ、多くの人々が死に追いやられ、生きていくのもやっとという困難にさらされ続けながらも、自由と誇りを守っていこうとしている民族の強靭さ。意思の強さ。そしてそんな中でも失われない温かな人間性。

西サハラは日本人には馴染みが薄い。どこにあるかも、人々がどんな境遇に置かれているかも、知る人は少ない。著者はそんな日本人にもよく理解できるように、平易な文章で、著者と西サハラの関わりを語り、この国の長い歴史とパレスチナにも匹敵する現代の受難を語る。訪問の様子や歴史的逸話はジャーナリストの面目躍如としていて、この砂漠の国を知らない読者も引き込まれてしまうだろう。本書の題名にもある通り、著者の関心は「なぜもうなくなっているはずの植民地がここには地球上で唯一未だに残っているのか？」にある。

1884年から1世紀に亘ってこの地を支配してきたのはスペイン。第2次大戦後、西サハラの独立運動に手を焼いたスペインは、当時は経済的利益

もさほどなかったこの植民地をモロッコ、モーリタニアに譲渡して1976年に撤退する。自分たちの預かり知らぬところで自分たちの帰属が決められてしまった西サハラ。モーリタニアは西サハラ南部に侵攻するが、ポリサリオ戦線の抵抗にあって、1979年に撤退する。ところがモロッコはハッサンⅡ世が自国領であるとアピールして1975年に緑の行進を組織して以来、もともと住んでいた人々を追い出し、モロッコ人を入植させ、モロッコ軍を送り込んで西サハラ北部のみならず全土を実効支配していく。追い出された人々はアルジェリアに逃げ込んで激しく抵抗し、同国政府の全面的支援を受けて、西サハラとの境界線近くにある砂漠のティンドゥフに亡命政府を設立した。国境地帯にも難民キャンプがあり、人々は数十年間テント生活で暮らしていて、新しい世代も生まれている。モロッコ支配地域の住民は、イスラエルの協力の下、地雷と鉄条網を使ってモロッコが設置した「砂の壁」によって、難民たちと分断されている。正式国名は「サハラ・アラブ民主共和国」(RASD)。アフリカ統一機構(OAU)の正式加盟国であり、そのためモロッコはOAUに加入していない。世界46か国から承認されているが、日本はじめ西欧諸国はモロッコとの関係上、国家として承認していない。ただしモロッコの領有権も認めていない。

難民生活を数十年耐え忍んでいる人々の希望は国連が提案している国民投票で、著者が最初に西

サハラと接触したのも1992年に実施されるはずの投票取材のためだった。その後何回も投票の実施が試みられたし、国連西サハラ住民投票ミッション（MINURSO）の目的も「停戦の監視」などと共に「住民投票の有権者の確定および住民投票の実施」と明記されているのだが、モロッコの反対で未だに実現していない。1975年に西サハラに住んでいた人が選挙権を持つという国連の規定では、モロッコ帰属か西サハラの独立かを定める住民投票の結果は明らかだからだ。しかも西サハラには豊富な水産資源と地下資源があるから、モロッコは絶対に手放したくない。

この地の人々が被っている不条理と難民生活の困難さ、地雷被害の大きさ、国際社会や日本政府の責任を著者は日本人々に訴えたいと思ってこの本を書いた。遠いアフリカの果ての話で、日本人には関係ないように見えるが、実は日本も今同じ様な問題を抱えているのだ。私は読み進みながら、日本で避難生活をしている人々のことが頭か

ら離れなかった。福島から国内避難している人々は、自分のせいではないのに、長年住み慣れた地に住めなくなり、経済的補償も不十分なまま、家族が分断されたり、不自由な生活を強いられ続けている。火山爆発で島を追われたり、大洪水で家を流されたりした人々もまた然り。気候温暖化や原発再稼働でこのような危険がますます高まることを考えると、植民地を広げようとした帝国主義と、利潤追求型経済がオーバーラップして見えてくる。もちろん西サハラの人々が舐めている辛酸は日本の国内避難民とは比較にならないほどひどい。しかし日本も例外ではない、と感じさせてくれる本である。

最後に個人的なことを述べさせていただくと、私は6年近くモーリタニアに住んだが、民族が非常に近いので、本書に描かれる西サハラの人々の生活習慣、衣装、食べ物等、ほとんどモーリタニアの記述と錯覚するくらいで、とても懐かしかった。